

かえてもらった、というわけですからあまり名譽なことではありません。今日も私の組の子が二人、とうとう物置に入れられてしまいました。子どもたちが帰ったあと私は、ほんやり考えこまずにはいられませんでした。こんなふうになったのは、いったい誰の責任だろう？ いつも子どもたちだけが責任をとられるが、それは不当なことではないかしら？ もし教師が託された子どもの実体を正確に捉えて、ひとりひとりの欲求を満してやる事ができたら……あのあり余っているエネルギーを上手に発散させてやる事ができたら……そして何よりもひとりひとりの子どもに、おちついた場所をじゅうぶんに与えてやる事ができたら……。

タンポポは、葉を大地にしつかりと掘れることによって、自分に必要な場所を確保し、平凡だが健康な花を太陽に向って開く……子どもだって同じことです。

しかし現実には、余りにきびしいようです。安い月謝、狭い園舎、不足している保育室、多すぎる園児、そして何よりも無経験で無力な教師としての私自身。二年間(けつして長い期間ではありませんが)私たちが真剣にとりくんだ問題は、「いかにして幼児の成長を助けるか」ということだったので、今現実の場におかれた私は、あまりにも無力な自分を直視して惨めな気持にならざるを得ません。

何とかしてひとりひとりを伸ばしてやりたい、よい経験をじゅうぶんに与えてやりたいと、あせるばかりで、きびしい現実の制約の前に、戸惑うばかりです。実際問題として、子どもはすでに私の前にあるのですから、苦しみは切実です。しかし、限られた中で、できるだけのことをするより他ありません。たえず勉強し、工夫し試み

ることによって障害をのり越えてゆく、これこそ私に与えられた大きな宿題だと思っております。(幼稚園教諭・埼玉)

保育者の喜び

樋口伊都子

そのことが実に素晴らしいもので、ある、と感じられるようになるまでに、私たちはこんな経験を通りこして、はじめて最上の喜びを知るようになるのではないかと思う。何かによる失敗が、彼を絶望に近い深淵に立たせることもあるだろう。また、若い彼の理想も、たちまち失望にとって変って彼を打ちのめしてしまうかもしれない。いや、完全なものとの対照から、未熟な彼は強い劣等感、恐怖心に縛られる。しかし、彼はそのままではない。ほんの僅なチャンスが彼を生き生きと、力強く蘇生させる。

それについて、私はこんな例を経験した。何もかもすべてが新しく、珍しく感じられたあの当時、学窓を巣立った雛鳥の私は、無我無中でそここにとびまわり、さまざまなることを吸収するのに精一パイの日々を送っていた。まったく喜びも悲しみも、ゆっくり味っている暇はない。いかなる場合でも同じこと、やがて慣れることから落着き、考える余裕ができてくる。まず、反省が誰の胸にもうかんでくる。明日への進歩のために考えなければならぬことだからだ。私の反省、それは保育室で忙しく過してしまふさまざま場面、子どもたちとの交渉態度、すべてが望ましいものであったかど

うか。妙な絵をかいた子ども、残忍な行爲をとる子ども、いろいろなことを考える結果が、遂に強い恐怖心となって私の上のしかかかって来た。たびたび起る喧嘩の仲裁が、何の悪影響も両者に残さずすんだらうか。遊びの場面においても、生活指導においても、おとなの不当な要求を強いはしなかったらうか。ああしたら、こうしたらあななりはしないかと、それが必要以上のいたずらな考えとなって、先廻りする。手足が完全に萎縮して、ただ「怖い」の一語がすべてを支配してしまった。たぶん、保育室の空気は陰うつな、おどおどしたものだたらう。どこの隅からも「生」を感じとれないほどに。他の組が生き生きとしているのにひきかえ、何とみじめな姿だたらう。とかく、私自身の考えを変えなければならぬ。まず、おとなであるという意識、教えるという態度を捨てることだ。努めて子どもたちを前にしたときに。こう心に決してから、しばらくたったある日の「話し合い」のときに、かつて、私が保育中に味ったことのない感激を覚えたのだ。それはごく普通の会話だった。しかし平凡に聞える言葉の内に、何か熱い気持のつたわりを強く、たしかに感じとった。すばらしい一瞬だった。その一瞬は、幼い子どもたちを一個の人間として私の目前に具現された。人間と人間のふれあい、心と心の接触、これを子どもたちとの間に感じとったと知った私の心は歡喜にあふれた。随喜の涙が頬を流れた。彼らの前に立ち、彼らから求められるものは、いつわらない真摯な人間の姿なのだ。子どもたちと青空のもとで満身に陽を浴びながら、無心に遊ぶときこそ、きっと私の顔は、満足しきった微笑をたたえているにちがいない。

(幼稚園教諭・東京)

掃除をしながら考えること

栗田成子

たった今子どもたちが帰ったあの保育室で習慣的に、掃除をしようとうきを手にしなから、今日一日の子どもたちとのやりとりを思い浮かべます。

G夫が言った「先生、ぼく、おばあちゃんきらいなんだ。」「なぜ?」「だって、お兄ちゃんにばかりいいおかずいれてやって、ぼくにくれないんだもん。」と、わたしはどう答えてよいかわからなかった。この地域には問屋が多く家の中は祖父母、父母、叔父叔母、店員と大家族制なので、いろいろな子どもにゆがみがしわよせされるようです。忙しい親は子どもを用人まかせにしたり、そうかとうと、ときには甘やかしたり、祖母の偏愛に差別されたりします。

G夫はこの差別のなかで淋しいのでしょうか。幼稚園では「先生こうするの」「先生遊ぼうよ」と、何かにつけて先生にくっついてきます。友だちと遊ばせようとすれば、友だちが仲間に入れてくれないと訴えてきます。友だちの方からどうのこうのというのではないのに、みんなと遊べないらしいのです。このことで母親と話し合いましたとき、母親は泣いて祖母の偏愛のあれこれ話してくれました。ほんとうにこのG夫をどうしてあげたいだろうか、またどれだけのことがしてあげられるのだろうか、と思悩むのです。

困るのはG夫だけではありません。S子は毎日歌のおけいこ、バ